



バスケットボールの全国高校選手権（ウインターカップ）県予選は29日、松山市総合コミュニティセンターで男子の決勝と女子の決勝リーグ2試合を行った。男子は新田が130

—78で松山工を下し、2年ぶり38度目の優勝を果たした。

女子は聖カタリナ学園と済美が2勝目を挙げ、リーグ上位2校入りか確定。愛媛の頂点を懸けた30日のリーグ最終戦を前に、男子の新田とともに12月23日から東京都で開催される全国大会の出場権を獲得した。

全国高校バスケット予選

新田男子2年ぶり頂点

女子は聖カタリナと済美出場権

▽男子決勝	▽女子決勝リーグ
新田 130	聖カタリナ学園 119
35313133	26313230
21162120	1891411
78 松山工	52 松山北
	済美 120
	24273633
	177134
	41 西条

【評】新田が試合開始直後から勢いに乗った。激しい守備でボールを奪いながら速攻につなげ、約2分間で120—0と一方的にリード。宮崎のドライブや今西の3点シュートなどで大差を築いた。松山工は第2クオーターにファウルで得たフリースローを機に中岡ら下級生が奮闘し追い上げたが、流れを変えられなかった。

新田

開始数分で風のように点を奪い、完全にペースをつかんだ。決勝までの3試合全てで100得点以上した爆発力を大一番でも発揮。新田が1点差で惜敗した昨年の悔しさを圧勝で晴らした。シーソーゲームとなった前回大会決勝の反省を踏まえ「アップから気を引き締め全員が積極的にいけた」と今西。足を使った守備で圧力をかけ、素早い攻守の切り替えからリングに迫った。最多33点を挙げ「自信になった」という宮崎のドライブや藤橋のスリー、縦パ

速攻圧倒 130点

ス1本からの和田の速攻で、出だしから12点を連取。人とボールが動く新田らしいリズムを早々につかみ、10点以上の差を維持して危なげなく試合を運んだ。

四国ブロックリーグが本年度発足。8月末から四国内の強豪校と毎週のように試合でき、足達は「入試などでメンバーがそろわなくても持ち味を出して戦えるようになった」。選手を入れ替えながら運動量を最後まで落とさず、ベンチ入り全15人が出場し14人が得点。選手層の厚さが際立った。

3年生は入学当初から新型コロナウイルス禍に翻弄（ほんろう）されその分、普段の練習にありがたみを感じ大事にしてきたという。玉井監督も「バスが次々つながる選手たちで全国が楽しみ」と期待。山内主将は「中を堅く守って速攻につなげ、小さくても勝てるバスケットで8強を目指す」と大舞台を見据えた。（宮内佑己）

【新田—松山工】第1クオーター、新田・和田が速攻を決め、12—0とリードを広げる。松山市総合コミュニティセンター